

[illegible]

[illegible]

おれはよく知らるるにや
るるを今も記すにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや

おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや

おれはよく知らるるにや
おれはよく知らるるにや

相我若乃金之銀

唐也者已往いふまゝ

毛氏按者接し唐

紹也し王叔法

田人も者生而

てあるしはいふまゝ

生持部接る也

一もてあるしはいふまゝ

其仲林心也者

は 持 部、 梅 子 屋
一 二 三 四 五 六 七 八
九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六
十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四
二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二
三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十
四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八
四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六
五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四
六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二
七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十
八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八
八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六
九十七 九十八 九十九 一百

ふ、清くもすり又ヶが
、印名を板にすす、左
ル、海を平すま、左
語上もあふし、カト
おし、とつ又、さき、女
即、名物を後所
的、本和り、さん、平
し、て、く、四、然、平、依
り、て、い、^{お、ま、い}、使、即、今
、く、は、く、ん、か、め、~~お、ま、い~~
、く、さ、あ、平、と、さ、り、あ
、あ、お、い、は、は、田、又、い、も

[illegible]

リ付るゝの口もさぬ

草 子 丸

二の元を年暮上の深み

まは

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

草 子 丸

ありてはるるをかりあし
馬車もあはれ上り候
福也、あゝ、惜し
と云ふし、ちやうど
うけ、あゝ、あゝ
うけ、あゝ、あゝ
あゝ、あゝ、あゝ

本間源三郎様中川

柳園家ノ密書ノ三ノ一

我得少多ハ相ノ杜ニ工
之 病ニシヤ保書ハお時ハ
午オ二時以相果トシ業式ニ
候ハ明ナテ西午出校候ナレ
右書ナリセリトナレ也

三月十日

書成多日はたてて
はけ多きや通書に候い
る文に云ふに「
是吊詞に賜物有
候は是等より
上候を贈る中
に格出たり
中函に云ふ
上候なり
之者 被田村介

本名保家標

三十一

拜啓 拙宅防

也、少政、人、関、人

、市、演、説、家、稿

、高、山、興、如、謝、人

、高、山、興、如、謝、人

、高、山、興、如、謝、人

、高、山、興、如、謝、人

、高、山、興、如、謝、人

下

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

乙
乙
乙
乙
乙

とて事山一にね

海より遠のく

所神をぬす

はれと有

よりた

竹るふ

女る光景

玉葉

おたけはきとみそは
法をきく六月つちさき
はちきり前十時ころは
あふあふとねはきき
はねききとみそは
あまじかきとみそは
あまじかきとみそは

あまじかきとみそは

二つはねききとみそは
あまじかきとみそは
あまじかきとみそは

本間源三郎様

おふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは
あふもきつは

あふもきつは

あふもきつは

如月一日心常

心常

布達西

甘蜜山

建仁院

市部

信

遊

上

心

一、德永、永清、永金、永

清、越、方、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

永、永、永、永、永、永、永

りまゝに
かゝる

あつた

まゝに

あつた

本

まゝに

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

[illegible]

清き水もさるや河のふ
りきくし玉を飯
粥へきききりて又
りきくし河のふ
しきくしきききりて
五ききくしきききり
てきききりて
七日きききり
きききりて
きききり

お給光刻

市井の一人

人に出る位に

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

市井の一人

亦然

史無訪長來改

良方、年年水出困

倚甘詩、位左之

一花、以改良方、

精伸、篤卜、承新

笑、年年、以、迄

六一層、以、改、良、好

鉄果、日、得、以、事、卜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

其除水厚賜

[illegible]

このまゝに

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

淨呈

傳以明公之旨故養父孝四之新室
一因忘而動之泣會動之安否言久
在汝乃安方亦午前十一時
淨來安所物之安之安之安之
愧乃之安之安之安之安之
近之安之安之安之安之
佛之安之安之安之安之

二月十九日

淨呈

西間三席樣

謹此奉告。各處。依。有。

印。於。七。村。廿。五。地。端。

規。字。今。年。另。本。年。

此。為。九。百。四。十。年。

五。月。收。訖。此。為。

本。年。之。計。此。為。

本。年。之。計。此。為。

此。為。

此。為。

本。年。之。計。

此。為。

お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、

お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、

お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、
お暇をなさる所は、
はたまた、

新
立
將
あ
会
法
宮
会
是
可
か

新

二
三

唯今有^る事^は多^しく^も先^づ
々^々と^も大^に決^まり^し
事^は然^るに^も要^する^に
仍^も其^の入^る世^にな^らば^も今^も
暑^く太^く暑^くなり^し海^の勢^も
勢^も大^になり^し也^にも^も
此^の事^はも^も是^の期^にも^も
乃^も成^る事^は固^に也^にも^も
三^の角^の勢^も大^になり^し也^に
其^の勢^も大^になり^し也^に
其^の勢^も大^になり^し也^に

三

和^の平^の年^の也^に

乃^も其^の勢^も大^になり^し也^に
乃^も其^の勢^も大^になり^し也^に

和^の平^の年^の也^に

世系記

金公

三

人

り

玉

二

七

一

十

一

十

一

十

二
七
四
三
十

己
子
三
十

一
七
四
三
十

八
四

正
月
初
三
日
山
川
集
卷
一
紅
印

子
三
十

正
月
初
三
日

山
川
集

林呈増々何故閑さる

遊々大度其今日

何はかきく看拜見

何秋後命友記何話

い通了代物、明細何

通了知付と何

廿九年九月廿七

廿九年九月廿八

廿九年九月廿九

廿九年九月三十

廿九年十月一日

廿九年十月二日

廿九年十月三日

廿九年十月四日

廿九年九月廿七
新定地

廿九年九月廿八
新定地

廿九年九月廿九
新定地

廿九年九月三十
新定地

廿九年十月一日
新定地

廿九年十月二日
新定地

古書

金五兩五錢
此乃前期租地租

金九兩五錢
此乃前期租地租

金五兩五錢
此乃第二期租地租

以新市に在る

金五兩五錢
此乃前期租地租

金五兩五錢
此乃前期租地租

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

金五兩五錢

たし通し候所は度々
明し甚だ可上事候事、実
私事病氣に付評議有る
辭職致出テ了候所分とテ
候所度月断テ申上候事
無之候共他、馬方、依頼
候事、衆、お事、お事、
仕合、事、存候在、私義
希望に達し候所は度々

セリヤ
及世法を以

本間様

[illegible]

王福也。此中人之卷。
物之方。後部。其後。
既。明。上。身。神。元。
安。在。於。世。世。之。
事。近。即。乃。即。將。
田。活。之。實。こ。り。の。秋。
三。月。日。吉。孫。坂。
市。其。地。所。出。之。金。力。
え。り。つ。る。日。中。印。
光。ふ。ん。成。法。一。年。板。
五。行。山。に。や。う。う。も。
砂。付。森。印。八。比。丸。
片。一。通。さ。か。ち。も。は。く。
了。き。と。お。し。り。あ。り。由。
今。を。お。し。て。五。十。由。

[illegible]

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

近、素實を傳ふ所
益自也健ふ事奉
此、少般に依れ有
之、主憲政友、兼、
ノ者、少、心願、カ、
何、方、少、存、カ、
之、安、カ、人、物、
只、カ、カ、カ、
中、カ、カ、カ、
悪、カ、カ、カ、
依、カ、カ、カ、
弟、カ、カ、カ、
一、カ、カ、カ、

号、不、乙

三月、

百、大、郎

本、間、様

[illegible]

少壯

[illegible]

不巧萬代也

華開海鏡

記

金田山折木

少麦

金田山折木

精

少麦

金田山折木

少麦

金田山折木

少麦

金田山折木

金田山折木



金田山折木

如盤

市廛日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

之者日多刻之者望之陳

丁卯年 石山牧子集

庚子年 丁卯年

丁卯年 丁卯年

丁卯年 丁卯年

丁卯年 丁卯年

丁卯年 丁卯年

丁卯年 丁卯年

年間 丁卯年

丁卯年

相澤 比中越 昭和五年四月

都知事 村岡 議員 会事次

才に推す此國政に何事か

多岐 平地 地所 主たる 以

致す此國政に何事か

通す市に 村長の 故其

欠席 此小生 此中 主

八分 吾 知山 猪の 故

本間 徳子 氏

子

如口極異之度也

此乃一書之文

理之明也

其理之明也

其理之明也

其理之明也

其理之明也

其理之明也

其理之明也

上
書

一葉
書

一葉

一葉

一葉

一葉

一葉

一葉

一葉

花

花

花

花

花

花

花

花

花

醉後一候重出此世

其意亦未可知

何生此世之為

石陰龍一集

子孫之世

龍之世

龍之世

子孫之世

新くきく、我の心

修義の心、初定書

主信の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

三多の心、石三橋書

木向源三橋

先、いふをきき置て

いふをきき置て

いふをきき置て 山花をきき置て

木向源三郎様

後、いふをきき置て

いふをきき置て

いふをきき置て

いふをきき置て

いふをきき置て

いふをきき置て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

8

書
海
南
島
の
地
理
学
の
概
要

張應之自述

如之聲。此書中。未見。在。

海公新集卷之八

茅春東山李氏

卷之八

附錄

法華經

少門外實修

實以旧屋和為之，
按舊方

予子事三封
沙青松刻之

行
入
子
子
子
子
子

此後何處方有
裝本

陽子
み時よりきりきり

漢書卷之九

保征

此後

金一沙

江子

7
7
27

二
本
卷
之
終
卷
之
終

日林橋古石山寺重修記

借入於江村屋

上
以
常

五月廿五日

不問

13/12

あ
ら
ま
は
は

~~1~~

12299 - 12299

此後
（以下略）

丁酉年九月、卯月
乙卯年九月、卯月
丙辰年九月、卯月
丁巳年九月、卯月
戊午年九月、卯月
己未年九月、卯月
庚申年九月、卯月
辛酉年九月、卯月
壬戌年九月、卯月
癸亥年九月、卯月

東の山に雲

此の山に雲を留めておく

活人書少前雖云云

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

此の山に雲を留めておく

才百様

（印）

鳳雛時有稱誦是此海不標

為全其健方於此起飛者

其勢如之驚風皆無異海中之

日居折介宜我之我乃以博少務念

其事上却說今被其為其無異也

其之迹跡之所其事臨本下

殊之其被已其是扶被

仰其以厚惜之段難有海中之

折節多何風情之無之其不覺

打過其懷之其早速其厚被

之其其之所給其教之打過其

仰付以厚惜一版難有舊迹
折節多何風情七無之由不覺
打過疎懷之為早速此厚禮
之之義之所始失教打過較
不雲尊許多布之為文軸
之統極之始有語聲多解之
多候白極了多事先此一和
尸之極在零氣極高毫多以
少中少能上之共主之極時
生候慶方之少多

公復謹言

四下

本部林本
安部孫本

木間源三郎様

下

多候日様一丁と云先は和
一丁と云在客家様と云
年日生一少能と云共と云強
生候慶安一と云

公陰様之

四丁九

各部様之

安部様之

本間源三郎様

掌下

力能任道者其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固
不立大方之見其心固

中書省
本府備
以史

抄寫此卷、會集時、
 多所定章、式、及、
 何、未、見、出、及、一、口、
 之、時、據、合、上、事、
 祇、錄、之、友、信、之、
 之、錄、之、友、信、之、
 也、
 可、見、之、

三好古

木間潭三好古

此

[illegible]

[illegible]

何れも此の如く
の如く此の如く
の如く此の如く

此の如く此の如く
の如く此の如く

指路那粗と大

神作

指路那粗と大

葉中演説之

筆記中巻

興と下中耐と大

と心と中耐と大

心耐と中耐と大

筆 記 中 卷

興 少 子 子 附 大

志 爲 書 久 之

必 同 一 有 成 老

有 成 一 有 成 老

揭 夜 只 今 有 成 老

有 成 一 有 成 老

有 成 一 有 成 老

有 成 一 有 成 老

有 成 一 有 成 老

...
...
...

掲 夜 只 今 写 水 反 片

人 亦 作 利 亦 持 也

... 苦 之 後 ... 郵

... 市 区 ...

何 未 終 時 ... 行 限

... ぬ ん ...

... 心 ...

... 志 人 ...

十二月十日新川村

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

農会稲米品評会

お唐

心合ふ道盡る方渡

一徳摩吉と云知者

衆しむら根は成る

枯ふは在障りしす

世世吟る相失る集

念ふ際お神す記

生る我より守り成る

おふふはふ候ふ心

のすしむすくはふ

しはふふふふふ

のすしとすくぬる角
 とは方志と對し餘止
 七却て失れし者も
 相違はれなく即ち
 頗る此を海生とて
 の令の如く其昔海
 とはと海とをん
 生と海とをん
 可き又本より
 決定す極く
 此は生と海と
 可き又本より
 決定す極く
 此は生と海と

此は世に傳へるゝ
る事なりけり
つる所なりけり
之の時分なりけり
なりけり
なりけり

海老

本馬様

やいゝとて申すは
おれをいふに少くあはれ
けりおれをいふに少くあはれ
おれをいふに少くあはれ
おれをいふに少くあはれ
おれをいふに少くあはれ
おれをいふに少くあはれ
おれをいふに少くあはれ

うらやま ぬいすま

おれをいふに少くあはれ

在子如心者見

事官姓

事如海

中書

子
在
家
中
子
在
家
中

和皇陛下奉書

打草金之山名

此乃草之山中

之極其山名

吾山之山名

此乃草之山中

之極其山名

吾山之山名

此乃草之山中

之極其山名

平江新和成
各十日耳他如作行
本館海內名士以爲本日
古不盡其言者則未若
此法也知已信然子
政因在中亦與之驚又古
亦有也竹紙在能花人金
一的山看之不故所就
沈博(子)帶日午後
二時五分頃後一部書
家牙通兄弟有年二十
七矣親居仁壽堂之東
而免出外者三白

[illegible]

[illegible]

